



最終出口映画 評論

bungeitakeshiba

隠された日記

MERES ET FILLES 2010年

アルシネテランはフランス映画配給の老舗。会社は存続しているが、どうやって???

さて、本作は残念ながら頭が空回りしている愚作だ。女流監督は自分のオリジナルで張り切っているが、なかなか観客はそうはいかんぞ！3代にわたる女性の家族を独自の方法で描いていく（映画いていく。）。素直にとってほしかった。

例えば、祖母を画面に出すときに、幽霊的演出を発揮する。主演女優も苦しかったろう。奇妙な衣装を着せられ、奇妙なセリフを喋らされ、奇妙な動きをさせられて。結局その効果は親切な客には理解できても、それは監督さんには甘えとなるだろう。

カトリーヌ・ドヌーブも期待に答えて奮闘する。期待とは監督の期待である。頑固ばばあの医者という役回りだが、どうなんだろうか？この美しきフランスを代表する世界的女優は、映画に最近大量に出演しているが、このパワーを本作では無駄にしているようだ。俳優が映画に出る理由はさまざまだろう。海の向こうの我々にはわからぬ。急に多産する背景は大体経済事情が反映されていることが多い。誰かにだまされて金を奪われたのだろうか？勘違いされるな、ドヌーブがそうだということではない。この映画ではドヌーブは魅力的ではないということです。もちろんそれは監督の責任だ。

先日シャブロールが亡くなった。ゴダールも80歳。トリュフォーはもういない。フランス映画もつらい時期にきているだろう。多くの新人監督の作品が日

本にも入ってくるが、一部の観客にしか受け入れられない。思い切ってアクション映画になる必要はないが、何か個性を出して往年のポジションを復活させて欲しい。

ノーホエアボーイ

NOWHERE BOY 2010年

イギリス映画。イギリス人はジョン・レノンの生母と叔母の関係をみな知っているのだろうか？日本人はこの映画でそれを知ることができる。しかし、本当にこうだったのかは改めて確認してみたい。

実の母親と育ての親が仲の悪い姉妹で近所に住んでいる。ジョンはそこを行き来してしまう。ジョンは強い個性があり、破天荒でパワーが溢れている。自分で考え込まず2人の親にそれをぶつけてしまう。このあたりの演出は非常に丁寧でよい。順を追っていて無理がなく親切である。狭い町の出来事で登場人物も固定化されるが、すすめ方が無理なくわかりやすい。高校生たちの演技も当時の衣装や、リバプールのロケで繰り広げられる芝居はとても受け入れやすい。バンド活動始めるプロセスや他のビートルズのメンバーにであうシーンは観客が最も期待するところだが、それらも非常にうまく処理している。ポールを演じる俳優もジョンと正反対に演出されていてそれも自然である。

丁寧な作り方で成功しておりジョンへの理解が深まったように思わせる。そして素直に思いたいし、思うべき。評論を読むと叔母を演じる俳優にだけ評価が高いようだが、無名でも他の俳優も健闘しており全体のハーモニーで語るべきだろう。注目される主役は厳しい役をしっかりと演じている。日本のファンも応援しているぞと声をかけたい。

音楽も過剰な配置をせず、小道具としてEPレコードを登場させたり上手い。まあ観客のレベルも高いのでここはしっかり備えたというところだろう。ラストシーンは「MOTHER」になる。当然と言えば当然だし、誰も素直に受け止めるだろう。オノヨーコのコメントも聞いてみたい。

今日は12月8日だった。場所は六本木のシネマート。

アメリカ 永遠の翼

AMELIA 2009年 20世紀FOX /ショーゲート配給

アメリカの社会史を学ぶと必ず登場するアメリカ・エアハースト。女性飛行家。社会運動家ではなく冒険家である。しかし、何故かよく出てくる。気になっていたところヒラリー・スワンクで映画化された。

1930年代のアメリカ。不況もあったが世界大戦を迎える前の期。夢を追いかけた多数の人物の中で、飛行機で世界を飛ぶという破天荒なチャレンジに挑んだ女性だ。映画ではその背景も描かれる。大事な資金源は実際の夫が会社の営利事業として支えられていた。恋愛ドラマにもなり、映画にリチャードギアが花をそえる。短い作品で、そうした経緯を物語るだけで十分な時間を使う。特に創意した演出はなく、主人公のチャレンジ精神の発展と結婚、行方不明となる有名な太平洋横断飛行まで順調に描く。

アメリカは普通の人ではない。当時の飛行技術や機材では遭難は予想されていた。それでも挑むのは勇気なのか無謀なのか。映画では本人の意思を尊重した進め方をするが、本人の葛藤に対してよりも男性との恋愛を同時に描いているのでそちらの方がわかりやすく観客は関心が飛行への挑戦には向きにくい。リチャードギアとイアンマクレガーがなかなか魅せる。女性としての魅力に特徴があるヒラリースワンクよりも数倍映画俳優としてこの二人がすばらしいのでどうしてもそうなる。アメリカの飛行への狂気はよって行方不明となる最後の飛行で観客に一挙に登場することになる。少し残念なのはその飛行直前、誘導係として同乗する男性が恋愛の誘いをかけるところだ。ここはバランスをかいている。

コックピットで遭難寸前の緊迫感は、基地との通信を行う業務上のセリフと、俳優の演技で観客の前に提示される。ここはかなり難しい場面で、うまく対応できる演出家はそうはいないだろう。この監督は女流だがやはりがんばってはいなくても、もう少し深いものが欲しかった。もちろんスパルバーグにやらせればよかったなどというつもりはありません。

監督のミーラー・ナイールはインド人。ハーバードを出て女優から演出家、製作者になった人物。ハリウッドで仕事をしている。過去はインドを舞台にしたり、アメリカで生きるインドの人々の話の作品だった。徐々にアメリカ映画で起用されるようになる。ついにこの作品はヒラリースワンク自ら制作を務め、ナイールを監督で撮らせている。大きな予算映画ではないが、アメリカ社会の著名人の映画化でかなり外国人のナイールには厳しい仕事だったと想像するが、見事な出来栄えと言えよう。

音楽が過剰なのが欠点。アメリカ映画だった、これは。ヒラリー・スワンクは本人に酷似した役作りをしている。かなり変わった女性だったわけで、これはハリウッドでかなり変わった女優という意味では最高の配役かもしれない。いえ、そうではない。ヒラリーは制作も務めている。この作品に体当りで挑んでいるのだ。

SPACE BATTLE SHIP ヤマト

2010年 TBS・東宝

いわゆるあのヤマトの実写である。1年以上前に撮影を終え、その後はSFXの制作を行いこの12月に公開となった。制作の発端は制作会社からの発案をTBSが受け、主人公役に木村拓也が決まってからだろう。

原作の映画化には批難覚悟の上で慎重な準備が進められ、特に物語はイスカンダルに往復し地球を救う乗組員の生死まで完全に納めなければならない条件をどうにかこうにか2時間15分にまとめることに成功している。キャラクターの造形はすでに知られたキャラクターであるため、かなり軽視され俳優の演技もあまり重きをおかれていない。配役された人たちもあまりに著名な劇画上のキャラクターに身を寄せるのが精一杯で、全く自主的な演技をしていない。しかし、この映画の成功はヒロインとヒーローがきちんとしていることである。監督の集中的な指導は二人に行われ、ラブロマンスに発展する二人の乗組員の活躍は映画の中心に生きている。

特撮は点で作られているものである。それをまとめる監督の力量はシナリオの完成さと連動し、本作を観客の期待に添えるものにした。アメリカのSFXと比べればそれはアンバランスであり、金と時間が出来具合を左右するこの分野の仕事だと考えれば正月映画にきちんと間に合わせた見事な仕事ぶりと言えよう。

奇想天外なストーリーは映画にするには最適である。夢物語こそ映画に求めよう。しかし、これだけ国民的に認知された有名作品を、木村拓也で映画にするのは並大抵の努力ではないだろう。アニメでなり得た原作を勇気をもって実写化したスタッフは表彰状ものである。

主人公の行動の原動力が当初は恨みであったものが愛する人への愛に変わる場面は感動的である。そしてその愛のために命を捨てる主人公の姿は日本人的で説教臭い。しかし、愛人の乗る避難船とヤマトをすれ違わせるシーンの映像は固唾を飲んで見守るしかない。そして、その時手を汗が濡らしているのである。

ソシアリズム

フランス 2010年

ゴダールの新作が東宝で公開だ。これだけでもニュース。本作の前に旧作をまとめて上映し盛り上げを企画。今日は平日初回。朝早く来ている人はそれなりの方々。まだ年末とは言え仕事納めが今日か明日かという状況でした。

かなり本格的な作品。80歳になろうというのでどのような背景があったのかは知らないのだが、よく練られた素晴らしい新作だ。3部からなる。その関連性は、後半になると映像が観客に与える充実感と高揚感がピークに達することで目的は達せられたろう。3部目に具体的な主張が強く描写されるが、それまでは魔法にかけられた心がただただ映像に引っ張られゴダールの手の中で踊らされるのみだ。その主張はかなり激しいものであるが、受け入れる受け入れないという判断は必要なく、本人もそれを強要している風ではあるが、身体を映像に託していればそれでよい。

この作品に回答をしたければ自分で映画を作るしかないだろう。満足した。

ロビンフッド

ROBIN HOOD 2010年

今年のカンヌでオープニングを務めたユニバーサルとイマジンの新作。リドリー・スコットとラッセル・クロウ。ケイト・ブランシェットと俳優はオーストラリアから。

ロビンフッドの物語というよりも12世紀のイギリスとフランスの戦争映画とうちだして欲しかった。SFXを多用せず、現地ロケーションで衣装もすばらしく（前のイギリス劇で使ったものだろう）、馬や当時の時代設定がリアルで楽しめる。ストーリーは単純だが、このくらいのエンタテインメント映画にはちょうどいい。勧善懲悪のいい人勝利の結末でわかりやすい。ラッセルクロウも健闘。女性の配役も型通りだが、色気も少しありよいのではないか。

25日に閉館となった西武マリオンにある日劇で久しぶりに見た。フィルムではなくDLPとのこと。全く言われなければわからないだろう。

酔いがさめたら家に帰ろう

2010年

東陽一の新作。西原えりこという漫画家原作で自分の夫婦生活を描いた物語。フリーカメラマンの旦那は家庭人ではなく、アルコール中毒とがん患者で若くして死ぬ。その旦那を主人公に付き合う家族の姿がメインテーマである。

浅野忠信のカメラマンが映画を支える。演出もカメラマンに力を注ぎ、病気に治療を受ける病院での生活に最も時間を割いている。病院で暗い環境だが、主人公は結構真面目で淡々と毎日を過ごす。映画の中でも医者が言うがアルコール中毒は社会からは助けられえない病気だ。それがこの演出に出ているのだろう。物語も周囲の家族は振り回されているわけで、見ていてもこういう男はほっとけばと言いたくなる。この映画の弱さは旦那の親が出て来ないことだ。妻の家族がいれば夫の家族もいるだろう。それがかたて落ちである。

西原役の女優はインパクトがない。子供もいるし、仕事はしていてももう少し疲れていたもいだろう。東監督の目はカメラマンに寄り妻の姿は重要視していないようだ。二人の子役が可愛いのでそれも見ている分には気にならないのではあるが。

死に至る病に陥る主人公の淡淡とした姿がクライマックスだ。病院の限られた環境の中で東は健闘する。そして自分の背景をスピーチするシーンでそれが成功する。浅野忠信ご苦労さま。

チェブラースカ

2010年

ロシアのアニメを日本で制作。40分の人形劇である。声は日本語。主題歌はタイアップ。

2つの物語があり、それを最後にひとつにまとめてクライマックスとする。チェブラースカ自体は小さな動物というか生き物で主体的には動かない。主人公はチェブラースカを育てるワニである。ワニをはじめとする登場人物と動物は個性的。オリジナルのロシア風味をそのまま引き伸ばしているのだろう。良心的な物語で愛を紐解く。優しさにあふれるが、物語展開にもう少し工夫があってもよい。悪役のおばあさんの存在が奇妙である。悪役がいないと成り立たないということでもないと思うが。

相棒 2

2010年

劇場版 2 本目。大ヒットしており予算も増えたか。犯罪が大型化し、必要な役者も増えた。しかし、展開が警視庁内で完結するためこじんまりとしてしまっている。主人公は事件解決で動くのもほとんど館内だ。警視庁の駐車場出口でたくさん芝居があるのもおかしい。チェイスのない車の出番は駐車場での発進シーンである。

おじさんばかりの出演、しかもみな渋い顔しているので暗くなる。隠し事をしていることによる演出なのだが、長くみてるとつまらない。突然主人公が飲んでいる店で女優が 20 秒だけ映るがこれも奇妙である。他女性は犯人だし、暗いのである。

水谷豊は大活躍であるが、大画面で皺がよくわかり疲れも見える。とにかくひとりで張り切っているからしょうがないのだが、水谷に寄りかかりすぎる制作姿勢も問題だ。ファンはもちろんそれを望んでいるのだが。

このパターンでは第 3 作は難しいのでは。しかしヒットしているので制作されるだろう。

あしたのジョー

2011年 TBS制作 東宝配給

劇画の映画化。実写での映画化は初である。巨星原作者は既に亡く、劇画ちばてつやは活躍中。二人がまだ20-30代の躍動期、黄金の講談社少年マガジンでその才を振るった人気作品である。人気作品であると同時に、漫画作品の傑作として歴史に残るあしたのジョーだ。

今回は原作に忠実にあくまで忠実に丁寧に映像化をしている。ボクシングは映画の一ジャンル。昔はチャップリンから、ポール・ニューマン、アラン・ドロンなど世界各国で制作された映画は数知れない。この作品は日本からのエントリーとして十分多くの人の視聴に耐える、記憶に残る十分な作品である。

俳優たちは著名キャラクターをどう演じるか悩んだろう。監督はそれをどう指示したのだろうか？実際に身体を使わねばならなかった主演二人はどう訓練をしたのか？その成果は我々を満足させるものだった。裸になるという演技はすべてをさらけ出さねばならぬ。山下と伊勢谷は演出の妙もあろうが、材料として100%の力を発揮した。矢吹ジョーの寂しさと独特な戦い振りは一種の哲学である。スポーツ選手というよりは、スポーツをやりながら生きる生命体だ。山下の演技は、余計な技術を使わず静かにカメラの前に立つことでそれに挑戦した。この静かな演技は、よくある方法とも言える。しかし、生身の裸を出すこの映画では、文字通り裸の演技がどこまで観客にアピールできるかが勝負だった。伊勢谷は少し異なる。力石徹はチャンピオンであり、年長者だ。矢吹よりもしゃべれなければならないし、白木葉曜子との関係も必要となる。減量などテーマが多い。彫りの深い顔から覗かせる目付きは若い頃の仲代達也を思わせ迫力十分である。

何よりこの映画の成功は原作に忠実だったことだろう。わかりやすい物語。際立ったキャラクターを傷つけることなく真摯に映像化に取り組んだ監督の手腕は見事だった。

私を離さないで

FOX。イギリス映画。制作にカズオイシグロ。そうあの日本人でイギリスで活躍する作家である。本人の原作の映画化。宣伝で日本に来ていたのは、自分が製作者だからなんですね。

不思議な映画。それはストーリーによる。こうした活動がイギリスで合法的に行われているのかどうか知らぬが、おそらく創作なのだろうと思う。そういう意味ではかなり強引な設定だ。

それでもうっとりしてしまうのは主演3人の力だろう。期待の若手国際派俳優の見事な姿に圧倒される。メリルストリープのようになるだろうキャリー・マリガン。スパイダーマンを演じている真最中のアンドリュー。パイレーツを卒業したキーラ・ナイトレイ。皆自分の役柄をよく理解している。監督の役割は、台本を忠実に現場でこなすだけではなかつたのだろうか。風景も物語に寄与し、寂しい若者たちを描くのに助けとなっている。

アンチクライスト

ラsfontリアーの2009年の作品。配給はキングレコード。不思議な配給会社である。2010年のカンヌに出品され、主演女優賞だけ受賞。100分と短い映画。ほとんど主役夫婦だけが出演するのでそのくらいでちょうどいいかも。

期待高かったが、これでは批難の方が多かったろうと心配してします。女性蔑視ということだ。セックス依存の主人公だが、過去作品に比べ更に監督は女性の性指向を強力に出している。これに答える女優さんはほんとに大変だ。明確な描写がないので、見た人の判断にゆだねられるが私の理解では、「アンチクライスト」というタイトルが意味するような物語と映像が結びつかなかった。誰かの解説は必要ない。それは監督自らしかできない相談だ。キリスト教の理解もにわか勉強ではヨーロッパ人が正面から向き合っているものに意見するのはおこがましいだろう。タイトルと関連なく内容を述べれば、これはひとりのセックス狂の女性の物語である。セックスに夢中になるあまり、息子を亡くし、助けてくれる夫をも亡くした。正確に言えば、夫については亡くそうとしたところだったが、腕力で優る夫に最後に反抗されて自分が夫に殺されてしまう。妻を最後まで救おうとした夫は極限で妻を殺してしまう。首を締めるシーンでは、妻の顔の表情を克明に描き、染めざるをえなかった夫の行為を深く深く印象付ける。二人は息子の死こそあれ、愛を築く努力をし悲劇を乗り越えていこうとしていたはずである。監督は残酷にもその二人を殺人者と被害者にして終わらせた。この監督にこれ以上映画を撮らせていいのだろうか？

妻を殺した夫は怪我をsいながら山を降りる。最後のシーンではその夫を取り囲む用に大勢の人々が山を登ってくる。この理解も難しい。夫を応援しているのか、独特な映像を撮りたかっただけなのか。誰か教えてください。